



(1) 緑友ハーモニー26年度運営体制

幹事長: 小林 力 (5回生)

幹事楽譜係: 岡真理子 (14回生)

幹事会計係: 清水あつ子 (14回生)1

パートリーダー: 矢島多恵子 (ソプラノ)、佐藤睦子 (アルト)

河野通久 (テナー)、上田昌紀 (バス)

(2) 今後の練習日程

1月16日 (金)	13:00 ~ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
1月16日 (金)	15:30 ~ 16:30	ミニ総会: 中央町社会教育館・102号研修室
1月23日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・レクホール (本館3階)
2月20日 (金)	13:00 ~ 15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月20日 (金)	15:30 ~ 16:30	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月27日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)

3月6日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
3月13日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
4月17日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
4月24日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月8日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月22日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
6月12日(金)	10:00～12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
6月19日(金)	13:00～15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
7月10日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
7月24日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
8月14日(金)	お盆休み	
8月28日(金)		
9月11日(金)		
9月18日(金)		
10月9日(金)		
10月16日(金)		
10月30日(金)		
11月6日(金)		
11月13日(金)		
11月20日(金)		
11月27日(金)	午後	コンサート 小山台会館3階大ホール
12月4日(金)	11:30～14:00	コンサート打ち上げ/クリスマス会 奥沢 NaKaMa

註1: 表中下線の日は奇数週金曜日です。ご注意ください。

註2: 6月は第3金曜日が第4金曜に返りました。

註3: 今年もコンサートを小山台会館で開催します。

註4: 10月、11月はコンサートに備えて月3回の練習になります。

註5: 今年のクリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて12月第1金曜日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

(3) コンサートとクリスマス会

今年もコンサートを開催します。日時は11月27日午後、会場は昨年ミニコンサートを開催した小山台会館3階大ホールです。曲目の中ではヴィヴァルディの見た日本の四季が目玉で、ヴァイオリン奏者も加わってくださるそうです。

クリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて、通常より1週間早めて12月の第1金曜日4日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

(4) 新しい歌

ミニコンサートが終わり、今年から新しい歌の練習が始まると思います。前回から新しい歌を導入するプロセスをが決められました。それは、ハーモニーのメンバーが歌いたい曲名を提出して、高島先生にお伝えし、先生が独自にお選びになった曲と合わせて、最終決定は先生にお任せする、というものです。ちなみに、ミニコンサートで歌った「美しく青きドナウ」はハーモニーのメンバーが希望した曲です。今回もそのプロセスを導入します。これまでに希望曲を提出されたのは住山さんと矢島さんだけです。他の方も奮ってご推奨ください。ただし今年はコンサートでヴァイオリン伴奏付きのヴィヴァルディが見た日本四季の大曲に加えて、さらに新しい曲も追加されるであろう情勢に鑑み、選曲はコンサートへ向けて先生に一任で良いと思っています。

(5) 4月号のひまつぶし

「国技館5000人の第九」
コバケンと日フィルのコンサート

清水あつ子
小林 力

「国技館5000人の第九」

清水あつ子

今年も「国技館5000人の第九」に参加してきました。国技館で一体どうやって？と言われそうだけれど、土俵を取り払い、勢い余った力士がよく飛び込んでくる、あの砂かぶりと呼ばれる平土間の席をなくすと、国技館の真ん中に結構なスペースができて、ここに指揮者・ソリスト・オーケストラが入り、客席はほぼ半々に合唱団席と観客席に区切られて、合唱団は5273人、

正確な観客数は不明だが満席だったという。

私と「第九」との出会いは2018年、地元のホールでの「第九」ワークショップだった。多忙だった現役時代を除いて、小学校から合唱をやっていたのに「第九」とは縁がなかったのだが、退職直後の4月からこのワークショップで素晴らしい指導を受けて、すっかり病みつきになってしまった。指導者は二期会のテノール歌手だったが、発声からドイツ語の発音まで、実に懇切丁寧な指導を受けることができた。

1年間の練習の仕上げの演奏会場でJTBの「ウイーンの学友協会が第九を歌うツアー」のチラシを目にしてすっかりその気になり、翌々月にはかの「学友協会」で歌うという得難い経験をしたのだが、その旅で知り合った「第九オタク」たちに誘われて、こんどは墨田区が毎年開催している国技館での「第九」に参加するようになったというわけである。

このコンサートは国技館の新築を記念して1985年に始まり、コロナでの中断を経て今年で39回目を迎えた。海外や全国各地から集まった歌手のうち、最年少は4歳、最高齢は97歳。3回目の私などはまだ「駆け出し」に過ぎず、緑友ハーモニーではソプラノの油井千津子さんが大先輩。3年前に惜しくも他界された山下ユミコさんも長年参加されていたと伺っている。

ベートーヴェンは演奏する者のことを考えてくれている、とはよく言われることだが、この「第九」の合唱ではアルトといえども上の「ミ」をピアノニッシモ、しかもアダージョで延々と5小節持続させられる箇所があり、私は密かに「断末魔のニワトリ」と自嘲しているほどである。ソプラノに至っては上の「シ」、テナーは「ラ」、バスも「ミ」まで。シニアが大半の歌手たちだから、若いときには出せたはずの高音も今となっては苦しい。すると大友直人マエストロは優しく微笑んで、「出せない方は勇気ある撤退をなさってください。出せる方だけ出してくだされば大丈夫です」と仰り、苦しい高音部は「出せる方も歌詞をつけようと思わずに母音だけ出してくだされば、歌詞は他のパートが歌いますから」と。大友先生は決して「そこはダメ！」などとは仰らない。「素晴らしい！」とまずは褒めてから、さりげなく「第〇〇小節からテナーだけもう一度」という具合に事実上のダメ出しをなさる。指揮はダイナミックかつ繊細で、腕の動きだけでなく、手指の微妙な動きを見つめているだけで強弱・緩急が自分の中から自然に引き出されていくという不思議な感覚を味わうのである。以前、小澤征爾氏の指揮で「第九」を歌った友人も同じことを言っていたように思う。

合唱者は椅子席かマス席を選べるのだが、私はいつもマス席にしている。

指揮者を間近に見られ、臨場感満点であるのは良いのだが、問題はずっと静かに座っていなければならないことである。第1楽章からの美しい調べに聞き惚れているうちに節々がこわばってくるが、立ったり座ったりするわけには行かない。やがて4楽章に入り、バリトン・ソロの始まりを合図に、一斉に「美しく」立ち上がることになっているのだが、よろける仲間を両側から引っ張り上げたり、歌いだす前のひと苦労である。

このコンサートに、オーディションはない。私を含め、自分が「歌える」と思う者が集まっているわけだが、練習に参加するたびに必ず何人か、独自のメロディーを歌っている人に遭遇する。マエストロに「まわりにそういう方があったら注意し合って」と言われても、そんなことができるはずもない。ドイツ語の発音もAlle Menschen！（全人類よ！）のAlleはアッレのような発音で、アーレとするとAale(ウナギの複数形)になってしまうぞと最初のワークショップではうるさく言われたのだが、♪ウナーギ人間♪が連呼されているなど、細かいことを言えばきりがない。しかしこれが5千人の大合唱となると、毎回聴きに来ている夫によれば「涙の出るほど感動的」なのだそうである。

アンコールには観客と一緒に「花」を歌った。すべてが終わって解散式となり、主催者はじめマエストロやソリストが次々と挨拶をした後で、マエストロがためらいがちにもう一度マイクを手にされて、墨田区は関東大震災でも第二次大戦でも大変な被害に遭い、「花」の舞台である隅田川も悲惨な光景となったことに触れられ、この美しい歌を抵抗なく歌える現在の平和に感謝して、私たちはこれを守り抜かねばならないのだと、静かに遠慮がちに話してくださったのが感動的で、ますます大友ファンになってしまい、来年も、再来年も、声が出て歩けるうちは参加するぞ！と意気込んでいる次第。

今回、80歳以上の参加者は433人。次回は皆さんもご一緒にいかがですか？

コバケンと日フィルのコンサート

小林 力

3月21日(土)にみなとみらいホールへコバケンこと小林研一郎指揮の日本フィルハーモニー交響楽団の第415回定期演奏会を聴きに行った。前回のひまつぶしにはブラームスのクラリネット五重奏曲について詳しく書いたが、今回の目玉はモーツァルトのクラリネット協奏曲である。

プログラムは、前半が、モーツァルト: クラリネット協奏曲 イ長調 K.622、後半が、ベートーヴェン: 交響曲第3番 『英雄』 変ホ長調 Op.55。

先回の ひまつぶし でも紹介したが、名曲の影に名手ありといわれるように、モーツァルトは友人でもあったクラリネットの名手アントン・シュタドラーのクラリネットの音色に魅せられ、彼が愛用していたバセット・クラリネットのために1789年9月29日にクラリネット五重奏曲 K.581 を作曲した。バセット・クラリネットは通常のA管より10cm以上長く、最低音も ミ(E) よりも2度低い音 ド(C) まで出せる。

さらにモーツァルトは最晩年、彼がレクイエムの作曲に取りかかる直前にクラリネット協奏曲を作曲、完成の1か月後に亡くなっている。未完に終わったレクイエムとともにまさにモーツァルトの最後の息吹だ。

モーツァルトが書いたバセット・クラリネット五重奏曲と協奏曲のオリジナル楽譜は紛失してしまい(シュタドラーの管理が悪かったせいだといわれている)、モーツァルトの死後10年を経て1801年に出版された楽譜では通常のA管クラリネットで演奏できるように編曲されており、A管で出せない低音は1オクターブ高い音で記譜されている。演奏に際してどちらのクラリネットを使うかは独奏者の選択だが、伝説の名手レオポルド・ウラッハ、元ベルリン・フィルの首席 カール・ライスターはA管で、昨年引退した名手ザビーネ・マイヤー、Yale大学の Music School の教授を務め、若い演奏家のお手本になるような演奏を残した デヴィッド・シフリンはバセット・クラリネットを使っている。今回独奏した 日フィルの首席 伊藤寛隆 もバセット・クラリネットを使った。

死の直前に作曲されたクラリネット協奏曲はモーツァルトの集大成といえる。この曲には彼の思いの全てが筆舌に尽くし難い美しさで表現されている。それには明るさも愁いも自在に表現できるクラリネットという楽器はピ最適だ。この協奏曲は独奏楽器の如何に関わらず全ての協奏曲の中でも燦然と輝いている傑作である。

第1楽章は軽快なリズムで奏でられるアレグロで、かなり技巧を要する。第2楽章アダージョは以下のような美しい主題ではじまる緩徐楽章で、ことにカデンツァのあとに回帰するこの主題はピアノッシモで、奏者にとっては弱音の美しさの聴かせどころだ。伊藤寛隆の弱音の美しさは際立っていた。



69

Fl.
Fl. C
Cl. pr.
VI.
Vla.
Vc.
Cl. b

第3楽章もアレグロの早いテンポで奏でられる昇高音はかなりの技巧を要する。中間部にふと息を呑むほど美しいフレーズがただ1回だけ現れる。このフレーズは曲中最も哀愁に満ちており、こんなフレーズをさらりと挿入するのは天才モーツァルトならではの魔術だ。左の楽譜(見にくくて申し訳ないが)

の上から4段目のクラリネットパートの135小節目から ミラーミドではじまり、145小節目から1オクターブ低くなり、ミファーフア#ソーソ#の150小節目までをコピーしておいたので、ご興味のある方は歌ってみてください。哀愁が伝わってくると思います。ここには示さないが次ページの157小節目まで続く合計23小節の美しいフレーズだ。

とまれ伊藤寛隆のクラリネットは私が今まで聴いた中でも秀逸であった。

さて、後半を飾ったベートーヴェンだが、私はベートーヴェンの交響曲では奇数番が好きである。この第3番もその一つだ。ここでは、コバケンの指揮が素晴らしかった。ここまで実績を積むと、経歴などどうでも良いが、東京藝術大学の作曲科と指揮科を卒業、1974年に第1回ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝、特別賞も受賞し、指揮者としてデビュー、情熱的な指揮ぶりで「炎のマエストロ」と呼ばれてきた。しかし80歳半ばを過ぎてその指揮ぶりには変化が見られる。無駄な動きを一切削ぎ落とした地味なものに変わっているのである。逆説的だが、指揮の理想は全く指揮をしないことといえるかもしれない。カラヤンの目をつぶった指揮はその方向に向かっていた気がする。いずれにしても、長年の付き合いの日フィルとは以心伝心、派手な動きは必要がない。それでいて50分を超えるこの大曲を暗譜で、一瞬たりとも飽きさせず振り切った。「炎のマエストロ」が「魂のマエストロ」に昇華しているのである。